

1 パイロットプログラムについて

各種の全国調査の結果から、本道の子どもたちには、基礎的な学習内容が十分に身に付いていない、脚力や持久力に関する運動が苦手、テレビやゲームの時間が多い、1日の家庭学習の時間が少ないなど、多くの課題を抱えています。

さらに、平成23年3月の東日本大震災以降、自然災害や防災への意識を高めることや急速に進むグローバル化へ対応する力など、幼少期から身につけることが望ましい資質・能力に対する社会的な要求が高まっています。

こうした状況を踏まえ、平成21年12月に取りまとめた「道立青少年教育施設についての基本的な考え方¹」において、子どもたちを巡る様々な課題やニーズに対応するため、「体験活動に関する実践的な調査研究を行い、学校や市町村で活用できる専門的な体験プログラム・アクティビティを開発」することを今後の道立青少年教育施設の新たな役割として定め、その具体的な取組として「パイロットプログラム」を実施しています。

パイロットプログラムは、「北海道教育推進計画」を踏まえたテーマに基づき、子どもたちや保護者へのアンケート調査や体験活動の効果を測定する「IKR調査²」などによって、プログラムの効果を検証しながら、改善を重ね、学校や市町村教育委員会で活用できるよう完成度を高めています。

平成24年度は次の13テーマを設定して取り組んでおり、特に、「子どもの読書活動の普及や啓発を図るプログラム」を重点として開発を進めました。

【平成24年度のテーマ】

- ① 不登校、発達障害児などを対象としたプログラム(洞爺・厚岸・森)
- ② 異文化・国際理解を図るプログラム³
- ③ 環境に対する気づきや環境保全に向けた行動力を高めるプログラム(常呂・厚岸・森・足寄)
- ④ 学習習慣の定着を図るプログラム(砂川)
- ⑤ 職業体験・職業観の育成を図るプログラム(砂川)
- ⑥ 防災意識や災害時の対応力を高めるプログラム(砂川・足寄)
- ⑦ 地域の歴史や文化を学ぶプログラム(青年・森)
- ⑧ 基本的な生活習慣の定着や生活リズムの改善を図る通学合宿などのプログラム(青年)
- ⑨ 運動を苦手とする子どもたちが運動習慣を身に付けるプログラム(青年・常呂)
- ⑩ 競技力向上のためのメンタルトレーニングプログラム(青年)
- ⑪ 家庭教育・子育て支援のためのプログラム(洞爺)
- ⑫ 地域における子どもの体験活動の指導者の研修に関するプログラム⁴
- ⑬ 子どもの読書活動の普及や啓発を図るプログラム(洞爺・常呂・厚岸・足寄)

¹ <http://www.dokyoj.pref.hokkaido.lg.jp/hk/sgg/grp/05/kangaekata.pdf>
(参照：北海道教育委員会生涯学習課ホームページ)

² IKR調査

国立青少年教育振興機構が開発した体験活動による教育効果を図る手法のひとつとして、子どもたちの生きる力を測定する調査。青少年教育施設の主催事業の成果を測定する指標としてより手軽に測定できる「IKR評定用紙(簡易版)」を用いて体験活動の開始時と終了時に調査を実施し、28項目の調査項目の結果から心理的・社会的な能力、徳育的能力、身体的能力の3つの上位能力及び積極性、視野・判断など14の低位能力で「生きる力」を測定することができる。

³ 「イングリッシュキャンプ」として実施。本報告書には掲載なし。

⁴ 国立青少年教育施設と共催で実施。本報告書には掲載なし。

2 平成24年度の各プログラムの効果についての考察

(1) 概要

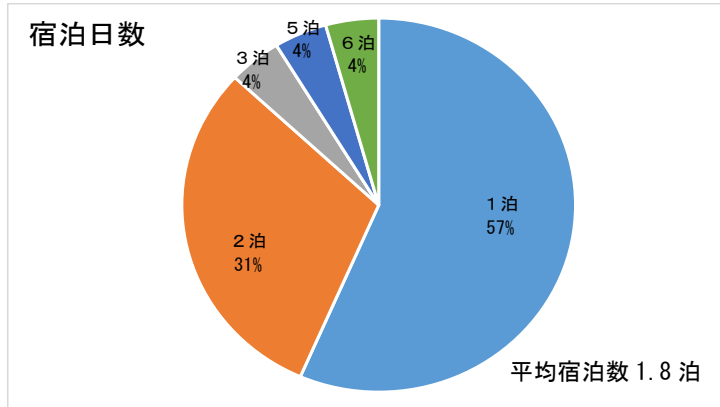
ア 実施プログラム数

23プログラム(※子どもの読書活動の普及や啓発を図るプログラムを除く。)

イ 定員充足率

総募集定員：656名 参加者総数：530名 充足率：79.7%

ウ 宿泊日数



エ 外部スタッフ

(ア) 外部講師

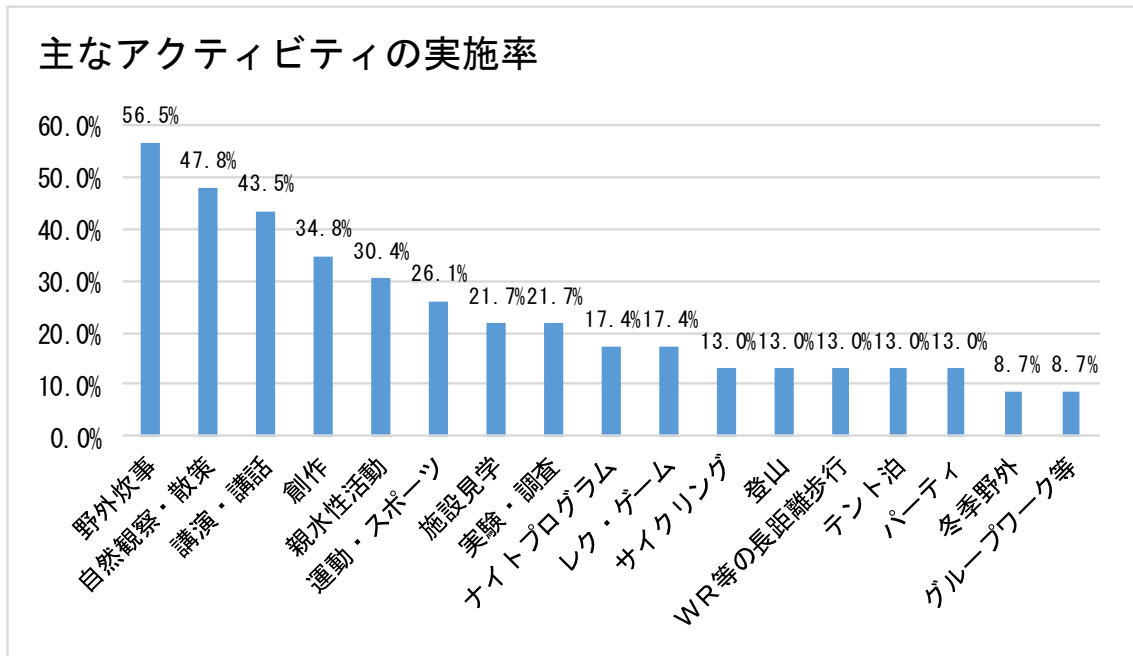
23プログラム中17事業で活用し、活用率は73.9%

(イ) ボランティア

23プログラム中13事業(延べ64名)で活用し、活用率は56.5%

ボランティア一人当たりの参加者数は8.5名

オ アクティビティ



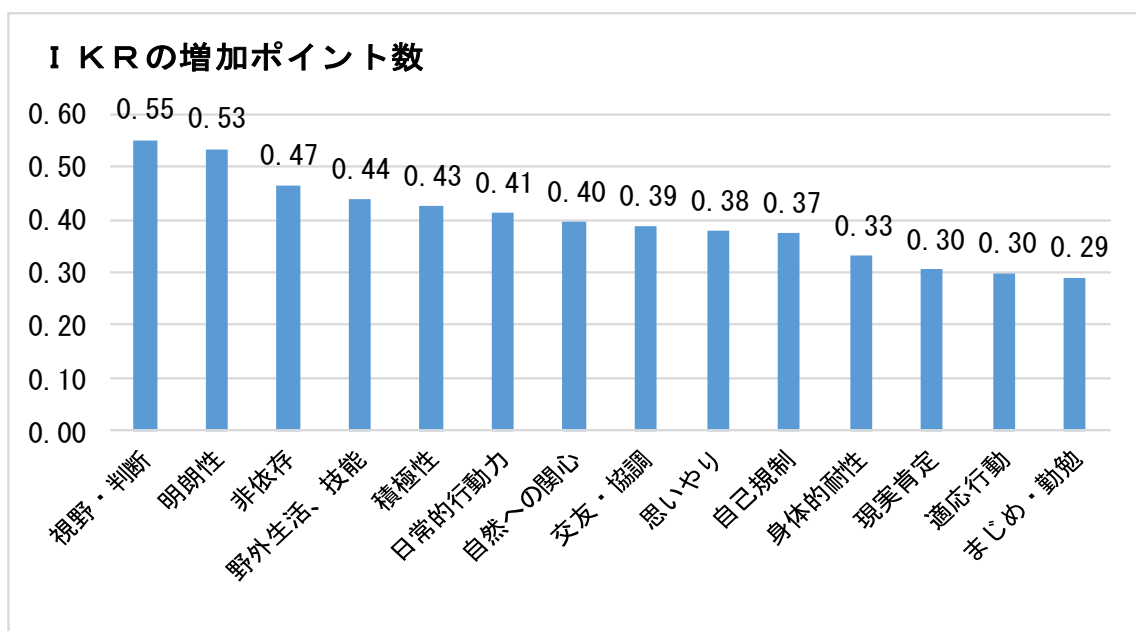
カ 参加者のプログラムに対する満足度⁵

平均4.65点

(「非常に満足」と答えた割合：70.2%)

⁵ プログラムの満足度について、事業終了時に調査票によって測定。5件法を用いて5点満点(非常に満足：5点-満足：4点-ふつう：3点-不満：2点-非常に不満：1点)として計算。

キ I K R調査（事後）の結果



(2) 分析・考察

ア 宿泊体験プログラムが子どもたちの「非依存」、「交友・協調」を高める。

I K R調査の14項目中、全てのプログラムで増加した項目は「非依存」、「交友・協調」となっています。

○非依存 ……0.47ptの増加

○交友・協調 ……0.39ptの増加

※ I K R調査の「非依存」の項目

「いやなことは、いやとはっきり言える」、「小さな失敗をおそれない」

I K R調査の「交友・協調」の項目

「多くの人に好かれている」、「だれとでも仲よくできる」

イ 2泊以上の宿泊体験プログラムが子どもたちの「視野・判断」、「日常的行動力」を高める。

I K R調査の全項目において、1泊よりも2泊以上の宿泊体験プログラムの方がポイントの増加が見られ、特に、「視野・判断」、「日常的行動力」が高くなっています。

ただし、定員の充足率は1泊の場合が86.0%であるのに対して、2泊以上の場合は74.7%と低くなっています。

また、プログラムに対する参加者の満足度はほぼ同じとなっており、泊数による満足度の変化は見られません。

○視野・判断 1泊の場合 ……0.42ptの増加

2泊以上の場合 ……0.72ptの増加

○日常的行動力 1泊の場合 ……0.28ptの増加

2泊以上の場合 ……0.58ptの増加

※ I K R調査の「視野・判断」の項目

「先を見通して、自分で計画が立てられる」、「自分で問題点や課題を見つけることができる」

I K R調査の「日常的行動力」の項目

「早寝早起きである」、「からだを動かしても、疲れにくい」

ウ ボランティアを活用した宿泊体験プログラムが子どもたちの「積極性」を高める。

プログラムに高校生や大学生などを活用した宿泊体験プログラムの方が活用していない場合よりも「積極性」が増加しています。

○積極性	ボランティアを活用している場合	・・・0.54ptの増加
	ボランティアを活用していない場合	・・・0.28ptの増加

※ I K R 調査の「積極性」の項目

「自分から進んで何でもやる」、「前向きに、物事を考えられる」

エ 野外炊事（食事づくり）が子どもたちの「視野・判断」、「積極性」を高める。

野外炊事や食事づくりのアクティビティを取り入れたプログラムの方が取り入れていない場合よりも「視野・判断」、「積極性」が増加しています。

○視野・判断	野外炊事を取り入れている場合	・・・0.73ptの増加
	野外炊事を取り入れていない場合	・・・0.32ptの増加
○積極性	野外炊事を取り入れている場合	・・・0.60ptの増加
	野外炊事を取り入れていない場合	・・・0.20ptの増加

オ テント泊や山小屋泊などのアクティビティが子どもたちの「非依存」を高める。

テント泊や山小屋での宿泊を取り入れたプログラムの方が取り入れていない場合よりも「非依存」が増加しています。

○視野・判断	テント泊や山小屋での宿泊を取り入れている場合	・・・0.73ptの増加
	テント泊や山小屋での宿泊を取り入れていない場合	・・・0.43ptの増加

(3) 今後の課題

ア 対象・プログラムの目的に応じた調査方法

幼児や小学校低学年、保護者に対しては I K R 調査の実施が難しい⁶ことから、対象に応じた調査方法を開発する必要があります。

また、スポーツや学習支援に関係するプログラムについても、I K R 調査より、例えば、新体力テストやチャレンジテストなどを活用した方が効果の検証という点では理にかなっていると考えられることから、多様な尺度でプログラムの分析を進める必要があります。

イ 運営方法の分析方法

野外炊事やテント泊などが、一定の効果をもたらすと考えられますが、これまでの分析方法では、どのような課題を与え、どのようなグループを編成し、どのような指示を出したかなど、アクティビティの運営段階を分析することが困難です。

そこで、複数の施設で同一のプログラムを実施するなど、アクティビティの運営方法がもたらす効果について、詳細な要素を抽出し、分析する必要があります。

⁶ I K R 調査は小学校4年生以上の児童生徒を想定した設問項目となっており、幼児や小学校低学年は理解に時間が難しい。

3 重点テーマ「子どもの読書活動の普及や啓発を図るプログラム」のまとめと分析

(1) 概要

北海道教育委員会では、「北海道子どもの読書活動推進計画（第3次計画）」（H25. 3）や「子どもの読書活動推進プログラム」（H24. 1）を策定し、学校での朝の読書（朝読）や家での読書（家読）など、子どもたちの望ましい読書習慣の定着のための取組を進めています。

平成24年度は、こうした取組を一層推進するため、市町村で活用できる新たなプログラムの開発を目的として、「子どもの読書活動の普及や啓発を図るプログラム開発及び実施要綱」を定め、道立青少年教育施設において試行的な事業を実施し、プログラムの効果について取りまとめました。

(2) 実施施設及び参加状況（4施設） 179名

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	計
洞爺 H24. 7. 27(金)～29(日)			15	12	7	6				40
常呂 H24. 10. 6(土)～8(月)				3		2				5
厚岸① H24. 11. 23(金)～25(日)			16	18	12	5	1	3		55
厚岸② H25. 2. 9(土)～11(月)			11	12	12	6	2			43
足寄① H24. 7. 7(土)～8(日)	1	1	4	3	4					13
足寄② H24. 10. 6(土)～7(日)		2	4	9	5	3				23
合計	1	3	50	57	40	22	3	3		179

(3) プログラムの状況

必須のアクティビティは、「野外での体験的なアクティビティ」、「1泊当たり最低2時間の読書時間」を取り入れることのほか、読書推進アドバイザー、施設ボランティア等の専門家を配置することとし、各施設のプログラムにおける時間数は次のとおりとなっている。

※ 選択制のアクティビティもあるため、一部重複有り

	野外での体験的なアクティビティの時間	事業中における総読書時間	専門家の協力によるアクティビティの時間
洞爺	10.5h(いかだ・野外読書・野外炊事)	11.5h(室内・野外)	2.5h(選書・ブックトーク)
常呂	6.5h(いかだ・野外炊飯・創作)	4.5h(室内・野外)	5.5h(図書館見学・読み聞かせ)
厚岸①	2h(野外炊事)	7.5h(室内・野外・アニメーション)	5h(図書館見学・ブックトーク)
厚岸②	3h(キャンプファイヤー・テント設営)	4h(室内・野外)	4.5h(図書館見学・読み聞かせ)
足寄①	4h(創作・野外炊事)	5h(室内・野外)	1h(読み聞かせ)
足寄②	4h(野外炊事)	5.5h(室内)	3h(読み聞かせ・ブックトーク)

(4) アンケート概要

ア 調査の対象

各施設の事業に参加した子どもの保護者

イ 調査の方法

各施設の事業の終了時にアンケート用紙を配布し、1ヶ月後に記入して返送してもらう。

ウ 調査項目

(ア) 本事業にお子様を参加させるに当たって期待されたこと

(イ) 家庭での読書について

- a お子さんはよく読書をするか
- b 保護者はよく読書をするか
- c ふだん、お子さんには、どのように本に触れさせているか

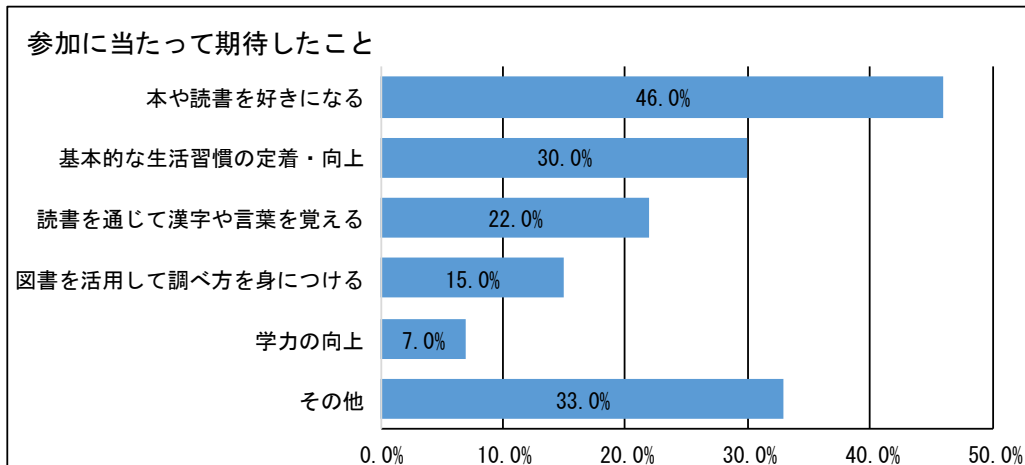
(ウ) 事業後、お子さんはどのように変わったか

- a 今まで以上に読書するようになった
- b 本や読書を話題として親子間の会話が増えた
- c 学習の時間が増えた
- d 興味や関心のあるジャンルが増えた

- e 早寝、早起きなど生活リズムが定着してきた
- f 学校や地域の図書館（室）の利用回数が増えた
- エ 調査票の回収率 55.9%（100名／179名）
 - （内訳） ・小学1年生1名 ・小学2年生3名 ・小学3年生24名 ・小学4年生35名
 - ・小学5年生23名 ・小学6年生11名 ・中学1年生3名

オ 集計結果

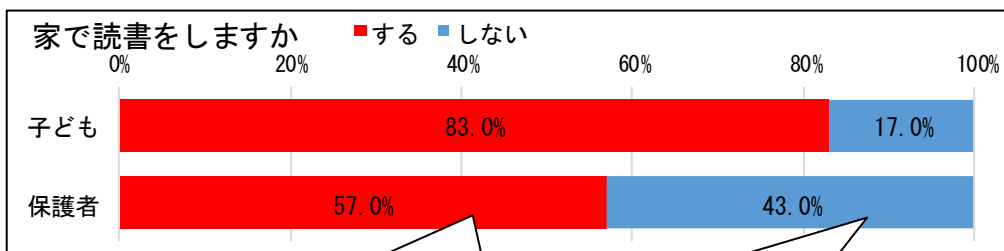
（ア）本事業にお子様を参加させるに当たって期待されたことは何ですか。（複数回答）



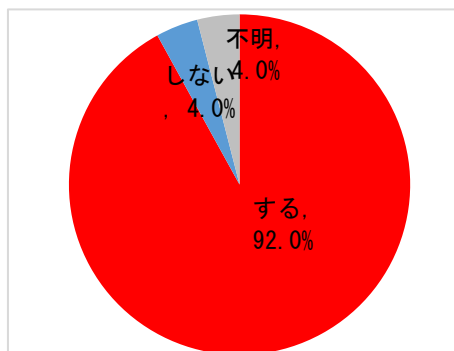
<その他>

- ・学校や学年の違うお友達との交流、・行動力をつけさせたかった、・交友関係の広がり
- ・今まで興味なかったジャンルの本に興味をもって欲しかった、・コミュニケーション力
- ・学校の違う子供との交流や思い出に残る人付き合い、・家ではできない体験をさせたかった
- ・本人が「楽しかった」と言って帰ってくる、・屋外での自然体験
- ・色々な人との出会いでコミュニケーション能力を上げる、・家庭以外での体験
- ・友達関係づくり、・校外にも友達を作ったり、色々な人と交流できるようになって欲しかった
- ・家ではできない体験、集団活動による経験値の向上、・他の人と本の楽しさを共有する
- ・集団の中で自分の役割等を考える、・友だちやスタッフの方とのコミュニケーション
- ・自分の興味のある以外のジャンルの本にも目を向けさせるため
- ・本の苦手意識を少しでもなくすため、・他校、他学年の友だちや親以外の大人との交流

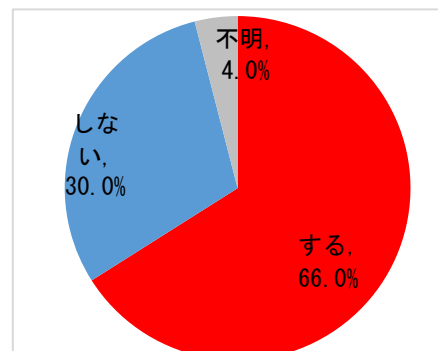
（イ）家庭での読書についてお聞きます。



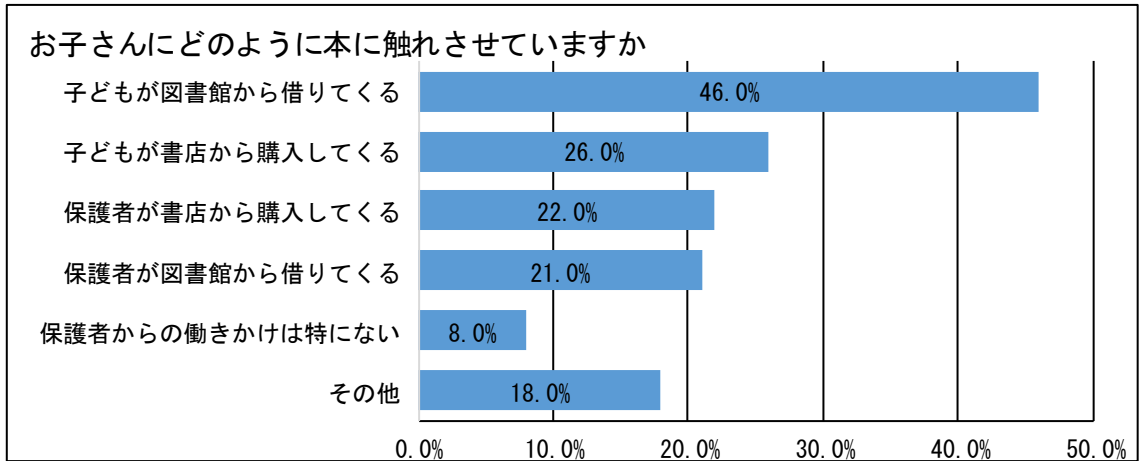
「よく読書をする」と回答した保護者の子どもの読書の状況



「読書をしていない」と回答した保護者の子どもの読書の状況



(ウ) ふだん、お子さんには、どのように本に触れさせていますか。(複数回答)

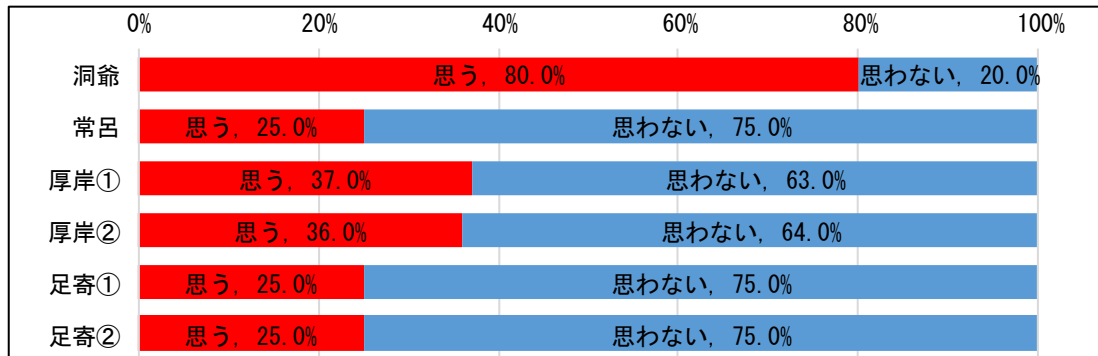


<その他>

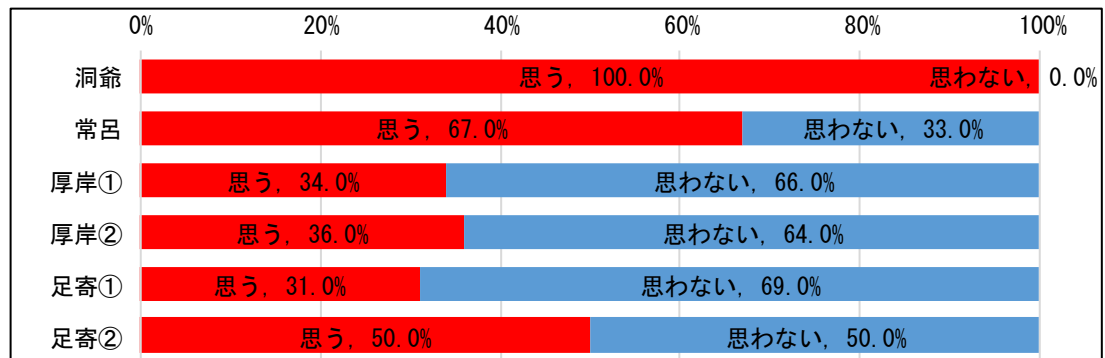
- ・自宅から図書館が遠いため移動図書館車を利用している
- ・毎月、祖父母からの本をプレゼントしてもらっている。

(エ) 事業後、お子さんはどのように変わりましたか？

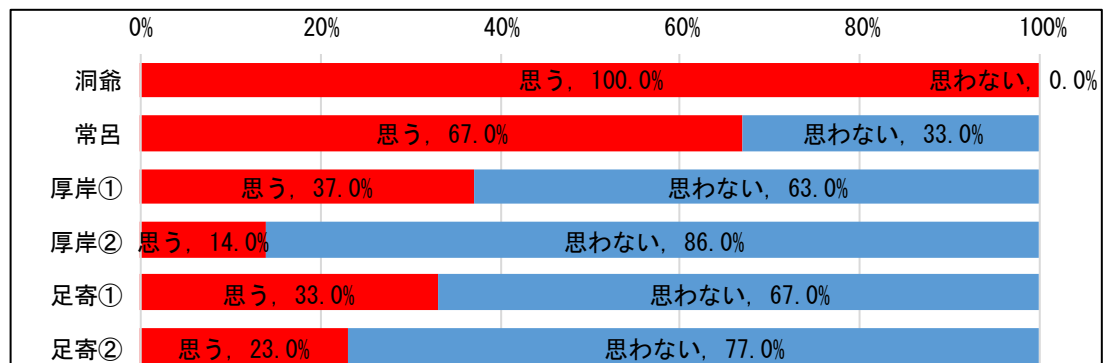
a 今まで以上に読書するようになった。



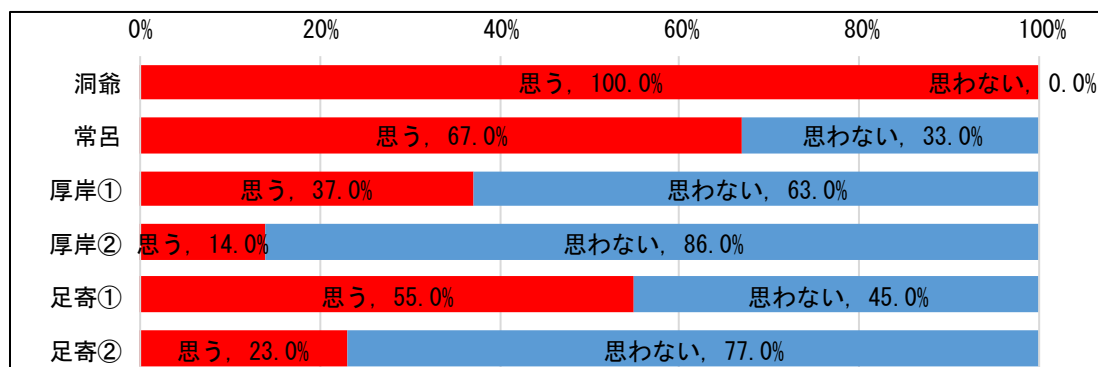
b 本や読書を話題として親子間の会話が増えた。



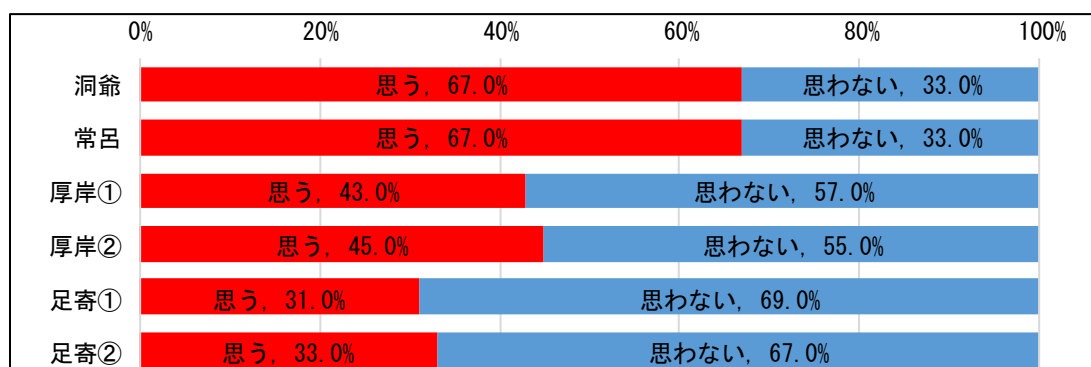
c 学習の時間が増えた。



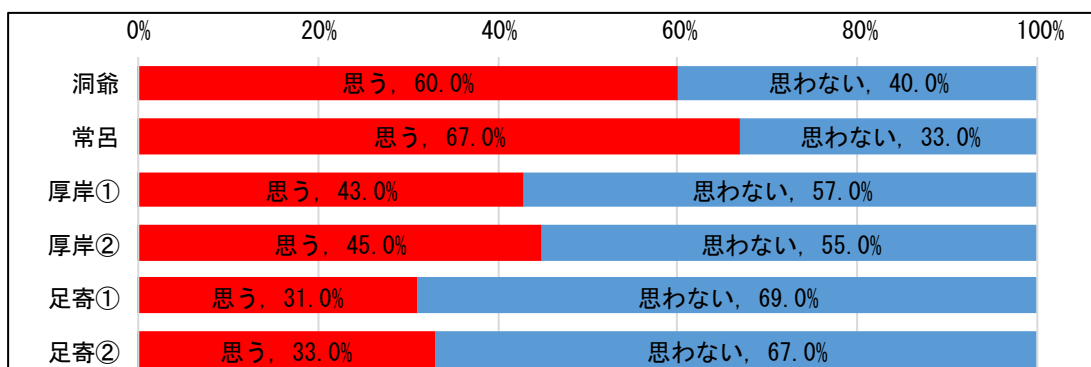
d 興味や関心があるジャンルが増えた。



e 早寝、早起きなど生活リズムが定着してきた。



f 学校や地域の図書館（室）の利用回数が増えた。



(オ) 保護者の感想・意見(主なもの)

- ・ 本が大好きなので我が子にはぴったりの事業でした。一人で読むばかりの読書とはまた違った楽しい3日間だったようです。
- ・ ほんの少し大人になって帰って来たように思います。自分から進んで宿題やピアノをやってくれるようになりました。
- ・ 山小屋がすごく楽しかったと言っていました。本好きの娘にとっては夢のような3日間を過ごせたようです。
- ・ まだ日が浅いので目に見える効果はありませんが、親の目的である友だちをつくったり、交流したりという面では楽しそうに出会いの話をしてくれます。メンタル面ではたった3日間なのに大きく成長したと思います。
- ・ いろいろな体験ができて楽しかったようです。ただし、読書時間はあまりとれなかったようです。「読書マラソン」のようなイメージで参加させたのですがそれでもなかったようです。今の子はとかく勉強や読書を長い時間こなすのが苦手なようですので楽しさだけではなくあえてそういった時間をつくることも必要かと思えます。

- ・ 学校や学年の違う友だちもたくさんできました。親元を離れての参加で本人の自信につながったようです。本への興味もわいてきたようです。
- ・ 図書館司書のお話や読み聞かせなどが良い経験になったようです。
- ・ 読書プラス一泊という、あまりない企画なので、親としてもまた参加させたいです。
- ・ 本にふれあうという目的の他に親としては、他校のお友だちと仲良く過ごせるといいなど考えていました。実際には、事業後のふれあいはないものの、2日間は色々とおしゃべりできたようで、安心しました。本人の良い経験になったと思います。
- ・ 自分に自信が持てるようになってきたと思います。よく話すようになりました。
- ・ あまり本を読まない子供でしたが、本も読み、とても楽しかったと言って帰ってきたのでうれしく思いました。参加させて良かったです。
- ・ 今回、参加させたのは、本を好きになってほしいということもありましたが、親元を離れて少しでも自立してくれたらと思い参加を希望しました。帰って来てからは出来事を楽しく話をしていました。またひとつ勉強になったと思います。
- ・ 新しい本との出会いで、本の世界の広がりを感じられたようで図書館（室）への興味がわき良かったです。
- ・ 帰る途中に早速、初の小説を買い、上機嫌でした。
- ・ もともと読書好きだったので、楽しく参加させていただきました。マンガや小説、伝記ものからガイドブック的なものまで関心が広がりました。
- ・ とても楽しかったと言っていました。ピザやパンの話が多かったですが、みんなと楽しく過ごし、本を読む時間を作っていただき、うれしく思います。
- ・ 本を多く読んでほしいことはもちろんですが、知らない友だちと一人でも仲良くしてほしいと思い参加させていただきました。学校以外の集団行動を知ってほしいです。
- ・ 今回の事業に参加して新しい分野へ興味の幅を広げることができた。そして、読解力もほんの少し向上したようです。

(5) まとめ

ア 専門家と連携したアクティビティが読書への興味を高める

事業後の参加者の変化で「今まで以上に読書するようになった」、「興味や関心があるジャンルが増えた」、「本や読書を話題として親子間の会話が増えた」との回答が多かった施設では、読書時間が比較的多く設定されているほか、ブックトークや図書館見学などの読書に関する専門家が関係したアクティビティが盛り込まれており、図書館や司書、読み聞かせサークル等と連携した効果と考えられます。

イ 保護者の読書習慣が子どもの読書活動に影響を与える

「よく読書をする」を回答した保護者の子供の9割以上が「よく読書をする」（【参考（アンケート集計結果）】設問2※1参照）と回答していることから、保護者に対する有効的な啓発プログラムを開発する必要があります。

（例）参加保護者による読み聞かせ、親子のしかけ絵本作り 等

ウ 施設の特性を生かした自然体験や日常と異なった環境下での読書が子どもの読書意欲を高める

自由記述による保護者の感想からは、読書と屋外活動を組み合わせたアクティビティに対する満足度が非常に高くなっており、各施設の特性を生かした野外アクティビティを効果的に組み入れていくことが望ましいと考えられます。

エ 保護者は読書以外の効果も期待して参加させている

保護者は読書への興味関心を高めることのほか、友だちづくりや参加者相互の交流も期待していることから、グループ編成や宿舎割りをはじめ、食事・就寝など生活指導場面におけるきめ細かな配慮が必要です。

(6) 平成25年度の取組

以上を踏まえ、平成25年度については次のとおり、「子どもの読書活動の普及や啓発を図る事業」実施要綱を定め、今後、さらなる検証を進めます。

「子どもの読書活動の普及や啓発を図る事業」実施要綱

1 事業の趣旨

北海道教育委員会では、「北海道子どもの読書活動推進計画（第3次計画）」（H25.3）や「子どもの読書活動推進プログラム」（H24.1）を策定し、学校での朝の読書（朝読）や家での読書（家読）など、子どもたちの望ましい読書習慣の定着のための取組を進めている。

こうした取組を道立青少年教育施設においても積極的に行うために本要綱を定め、共通事業として全施設で実施し、実施結果の分析等を通して、子どもの読書活動の普及や啓発を図る新たなプログラムを開発する。

2 実施施設

道立青少年教育施設全7施設

3 参加対象

- (1) 原則として、小学校3年生以上とする。
- (2) 募集人数は、各施設の実情に合わせて設定する。

4 プログラム

子どもたちが読書や本の魅力に触れる・気付くために効果的だと思われること。

- (1) 宿泊を伴うプログラムとすること（泊数は、各施設の実情にあわせて設定する）。
- (2) 野外での体験的なアクティビティを盛り込む。
- (3) 1泊当たり最低2時間の読書時間を確保する。
- (4) まとめや読書感想の発表会を行わない。

5 企画・運営に当たっての留意事項

(1) 必須事項

- ア 読書推進アドバイザー、施設ボランティア等を必要に応じて配置
- イ 朝読、家読運動のチラシの配布など、家庭・保護者への啓発
- ウ 事業期間中に参加者が十分に本に触れられるようたくさんの本を配置

(2) 任意事項

- ア 集団読書のアクティビティ
- イ 道立図書館との連携・司書の派遣・大量貸出
- ウ 近隣市町村立図書館(室)との連携

6 プログラムに関する分析

(1) 方法

- ア 「I K R調査用紙」による調査(通常のパイロットプログラムと同様)
- イ 保護者へのアンケート調査(方法は別途提示)
- ウ 支援者等による観察(方法は別途提示)

(2) 分析

- ア 各種調査の集計及び分析は青年の家グループが行う。
- イ 報告書の取りまとめについても社会教育・読書推進グループと連携の上、青年の家グループが行う。

7 その他

- (1) 開催要項(チラシ)は、募集開始の2週間前までに道立青年の家へ提出する。
- (2) 図書館司書の活用についての希望がある場合は、社会教育・読書推進グループまで申し出るものとする(必ずしも要望に添えない場合がある)。
社会教育・読書推進グループの運営補助についての希望がある場合も同様とする。